

句
遊

第十集

平成二十三年三月

シヤン」と音頭を取ります。蛇足ながら一回手を打つのは蚊か蠅を叩く時、二回は仲居さんを呼ぶ時です。これでは締めになりません。

本年四月三日は東京日本橋が架橋百年を迎えます。木に代わり石造りの国の重要文化財ですが、頭上に高速道路が重なる名橋日本橋に

粹と野暮百年の春日本橋

句遊会も新旧の遊俳（会の名前の元となった）により更なる向上発展を期し、中締めの口上申し上げます。

（付 記）

平成二十一年、二十二年度句遊会の活動状況
月例会：平成二十二年三月 第二百四十回

二十三年三月 第二百五十二回

写友会、画友会との合同展

監査懇話会 第十六回合同展

平成二十二年一月文京シビックギャラリー

吟行句会：平成二十二年四月 市川弘法寺界限

二十一年十月 草津温泉一泊

二十二年四月 六義園

二十二年十一月 鬼怒川温泉一泊

作

品

五

初音

石野喜粹

初音聞く箱根軌道の折り返し

年の豆幼な顔なる百寿かな

啓蟄やせせらぎの音立ち上る

すみれ草バレエ帰りの少女達

階の涙石守る晩桜

老鶯は死なず最後の寮歌祭

発車ベル旅の口開け缶ビール

天に星地は札幌のビール園

戦士の碑あの夏のまま十五歳

甲子園球児の涙晩夏燃ゆ

あるたけの棚田を区切る曼珠紗華

紅葉分け古釜の滝滔々と

黄落をかけ流したる露天の湯

山茶花の音なくこぼる石畳

共白髪つかず離れず日向ぼこ

かくしゃくと五年連用日記買ふ

赤富士の初日を拝む忍野の湯

若水の爛で華やぐ純米酒

句会と別に合同展写真と俳句の部に古荘宏氏の写真
「古川庭園」に付して

薔薇の荘古河の水絶えずして

金 婚 式

八

中 路 素 童

金婚式迎ふ傘寿の明の春

雪解水木樋を奔る宿外れ

鶯の声聞えしと厨妻

啓蟄や地下鉄を出て深呼吸

瀬戸の旬捌く包丁春兆す

漉き上る和紙に命の春の水

そぞろ行くむくさの園に花惜しむ

たかななに尻突つかれし石佛

甲斐青嶺蛇笏山廬に雲動く

木遣歌流れ墨堤緑雨かな

女郎蜘蛛手持ち無沙汰の昼下り

漱石も噫す全集曝しあり

トルコ壺シルクロードの熱砂秘め

紺朝顔露地に育てて佃島

霧の声言霊となる神の山

火の山の稜線著く冬に入る

永らへていのちたふとし波郷の忌

寒牡丹照る日曇る日藁まとひ

昨年九月に退会しましたので、第十集への出品が最後になりました。

二十年間、句会、吟行に、皆様と楽しいときを過ごさせていただきましたこと、改めて深謝申し上げます。「句遊会」の益々の繁栄と皆様のご健吟を心からお祈りします。

鮎

生江沢 広雄

若水や汲む手のもとに福来る

蒼天に鳶舞ひ踊り草青む

大試験荏柄天神絵馬之数

啓蟄や光流れる谷戸の川

冷奴浮き世の憂さを忘れけり

つぶすよし丸ごともよし苺かな

法堂の隅に控へし蜘蛛の網

水清し鮎のほかなき鮎の里

父の日に甕焼酎の届きけり

登山帽数多メタルの輝けり

サングラス外せば福の顔となり

沙羅の花散り敷く白き梵字かな

父引けり朱線残りし曝書かな

皮むけば玉蜀黍の愚直かな

悠々ととんび輪を描く野分晴

山は暮れ巡礼霧に溶け込めり

わが道の余生いくばく星流る

夕暮れの日を集めをり冬紅葉

大夕焼け

一一一

六川里風

咲きそろひ日々佳き日なり福寿草

添へ書の言葉楽しむ賀状かな

雪解けの波滔々と千曲川

葛飾の真間の継橋花曇り

山吹のもつれもとかず花かさね

向きむきの枝豊かなり雪柳

下萌えやおもひおもひに未来あり

麦の秋関東平野の風乾く

一滴もあまさず新茶汲み分くる

満洲といふ国ありき大夕焼け

白根山頂色なき風の渡りけり

火口湖の大地の息吹冷まじや

押し寄せるしろがねの波芒原

友の訃に心の追はれ秋深む

湯けむりのいよよ濃くなり冬に入る

ノモンハン亡びし国の大枯野

花びらの透きて洒脱に寒牡丹

何もかも過ぎたることや年忘れ

木挽き唄

清家静楓

二杯目のかわらけ乾せり初詣

図書館の開かずの窓や冬紅葉

老いゆゑに炬燵の恋のもどかしさ

潮目射す灯台岬冬の海

水仙の傾きしまゝ竹の筒

満つるより散り行く様の花が好き

しぶき上げ疎水溢るる春の水

漬物を添へてもてなす新茶かな

麦秋やドミノ倒しの風の波

見上げれば我が身まで揺れ青葉風

夏山や遠くに響く木挽き唄

虫干や古刹秘蔵の江戸草紙

生ビール一気飲む女高笑ひ

夜明けまで裏木戸叩く野分かな

芒原うねり一条駆け抜けり

湯を頼み暮らす草津の秋は行く

夫を待つ厨の灯影秋深し

掃きもせでたゞ山茶花の散るままに

唄 乗 せ て

一六

佐藤 政 百

波に揺れ光の帯の初日かな

水仙花添ひ野仏の笑みこぼる

鶯やひと鳴き路地の鎮まりぬ

長き旅安房に辿りて肥後すみれ

唄乗せて娘船頭水の春

碧天にしだれ桜のDNA

こわもてもえびす顔にも花吹雪

白牡丹匂もろともくずれけり

杉古木纏ひし衣の藤の花

黄苺や実はせせらぎの音の上

卯の花や畠の境界の花となり

細胞の蘇生いつきにビールかな

鉄鉦山の鉦夫の唄やななかまど

芭蕉葉の雨打ち風を煽りをり

夕霧に濡れし瞬くネオンの灯

路地行かば姿あらねど金木犀

秋深し無人の駅に電車着く

うまし夜の刻を忘れておでん酒

初 電 話

一八

向
井
眉
山

賑々し子らの声する初電話

しみじみと酌む年酒や老二人

散り終えし辛夷静に揺れてをり

雨に濡れ人恋ふるごと黄山吹

啓蟄や目礼交はす遊歩道

たおやかに露地耀はせ花莖

果てしなき轍どこまで草萌ゆる

濃く淡くしだれし花や真間の里

襖絵のしづもり埋むる匂鳥

飛び交ふる光と風や夏つばめ

右手左手きりりと決めて阿波踊

水の輪の重なり会ってあめんぼう

冷房車どこかで匂ふ正露丸

新幹線スイと横切る麦の秋

風呼びて霧吹き上ぐる槍・穂高

風を呼び風をつないで芒原

冬の海阿修羅見ること咆哮す

赤紙の来ぬ国佳かり七五三

老
い
柳

宮
川
至
剛

ひとつづつ五欲失せゆく去年今年

海境のはるけき舟や初日受く

去年に得し同じ日向に露の臺

妻一夜あらで新雪つもりけり

気負ひなく生くるは寧し犬ふぐり

やさしさを虚空に流し老い柳

遠きかの日の団欒や豆ごはん

清明や白襖とち母逝けり

鮎を掌に肌に通きたる苔の色

京の旬盛りて見飽きず夏料理

夫婦仲いつしか淡し新茶くむ

水よりも流灯の火のしづかなる

老い先のことは思はず薄紅葉

盃に花びらおとし菊供養

四阿に座す秋思とも齡とも

薯切千少年に喜寿来たりけり

凧のさきぶれ山湖の波忽々

逡巡をかつ攫ひゆく冬の波

家族のことなど

眞田宗興

福寿草病の兄の枕元

菜の花や鼻欠け地蔵を包みわり

菜の花や弁当開けば卵焼き

啄木を覗きこんだる春の風

亡き父やにわか床屋の春の庭

役員に非を非と告げる辛き春

我に似てやせて小さき孫入園す

おかしやな病の話で花が咲き

めだかさんやれ見えるか鯉のぼり

鯉のぼり遠くの城址は腹の下

夏が来た激辛ラーメン太陽亭

蝉落ちて夕日が落ちる家路かな

息災の母とうれしやスイカ食う

廃屋やどんな歴史が彼岸花

ススキ野を真つ二つにして多摩流る

死神がいて神もいて月夜かな

兄を見舞う帰りの夜道月照らせ

百歳の母の祝いは霜月二十日

母が百歳を迎え、兄が癌で入院し、森進一が好きだった義母が九四歳で亡くなった年でした。私は、何とか現役で頑張っています。

旅の御人

森 邦彦

越前の荒波和む水仙花

追羽子の心地よき音遠くなり

雪解けの水田に鴉舞い戻る

鳥帰り湖面のどかに竹生島

空染めて桜満開真間の里

筍の歯ごたえ美味し雨の京

妙高も跳ね馬消えて夏の山

木の橋に梅雨の濁流大井川

櫓より屋台に群れる盆踊り

夕焼けに染まるさざ波鳩の湖

長州路田毎燃え立つ曼珠沙華

紅葉川鉄の化石の夢の跡

廃駅の万世橋に芒ゆれ

秋深し雨に打たれる御柱

木の枝が力こぶ見せ冬来る

青空に楯岩そびえ紅葉染む

讃岐路はうどんの伴のおでんかな

酒美味し今年も元氣年忘れ

兼題を与えられると、その言葉の向こうに思い出すのが、勤務の都合で移り住んだ彼方此方の土地の姿。新潟では「旅の御人」と呼ばれ、違和感を覚えたが、今になってみれば懐かしい土地ばかりである。

蜘蛛一筋

勝田冬川

節分や歳の数ほど豆食えず

下萌えやしなやかにして強靱に

啓蟄の空に伸びゆくクレーンかな

さくら散り宴の後のむなしさや

嫁入りの門出を祝う牡丹かな

武蔵野に日の傾きて麦の秋

古希過ぎて夏にテニスで充電し

父の日に思ひもかけぬ祝い膳

静けさや蜘蛛一筋がよぎりけり

夕焼けや明日の命の永らえむ

走馬灯私の人生ふりかえり

花芒親しき友と語りゆく

秋深し町のお舗も店じまい

久方に初冬の富士のくつきりと

冬牡丹現世うっしよの母偲び居り

冬の海空に輝く北斗星

おでん酒昔話に時忘れ

大年の潮上がりゆく隅田川

童 心

二八

中 山 知 祐

母と妻雑煮の味の代替わり

羽子板や飾るうれしさ孫娘

雪解のしづく一滴大宇宙

針供養優しい姉の思いやり

床の間も華やいでいるひな祭り

新学期クラス分けでの泣き笑い

お台場も墨絵に変わる春霞

麦の秋一年生と背比べ

蜘蛛の巣をそつと教える反射光

あめんぼう表面張力教えてね

虹の橋台場羽田をひとまたぎ

城はるか郡上踊りの下駄の音

黙々と台風の後野良仕事

朝霧や荷役の事務所波の上

運動会みんな心はスーパーマン

炊き立ての新米鎌にまず供え

七五三家族三代晴姿

度忘れを思い出したり年忘れ

旅 枕

大 仲 正 敏

轟々と山路を揺する雪解川

湖面にも舞を映して鳥帰る

妖しくも灯りに浮かぶ紅枝垂

ペダル踏む風の流れに葦草

窓越しに白磁を濡らす青葉雨

父の日を同じ齡で過ごす夜

再会も思い思いのビールかな

小屋近し霧の流れに若い声

夏の山雲取小屋の雑魚寝かな

面影にはつと見返る藍浴衣

川床の早き流れに手を任す

土埃継ぐ人も無く葡萄園

鉄化石万古の森の秋思かな

秋深し他人の便りの沁みる夜

踏み切りや子犬抱きあぐ夕時雨

豆腐食ぶ雪見障子に渡月橋

水仙の月明かりなる夜の海

追羽根や日も傾きて三味の音

旅の想い出、人との出会いと別れ、感動そして嬉しさ・悲しさなどをそれぞれの季節に合わせて乗せていく五・七・五の世界は、大変魅力的な、しかし不思議な時間・空間のように思えます。これからも寄り道、迷い道を繰り返しながら発見の旅を続けたいと思います。

木 洩 れ 日

高 世 庸 行

冬の梅今朝初めての蕾みる

踊子の川面きらめく年忘れ

この歳で知る喜びや寒牡丹

奈良田の湯連れ立ちて入る今朝の冬

五輪沸く真央ヨナ舞って春来たり

籠町と呼ばれし辺り桜咲く

弥太郎の夢想う庭つつじ咲く

新茶よと今年も弾む妻の声

書を捲る木洩れ日樂し青葉かな

蜘蛛の巣や滴キラリと雨上がり

今宵また苦楽肴にビール干す

メールする芭蕉の陰の少女かな

失いし日々浮び来る夜霧かな

色づきがみずみずしくも若紅葉

武蔵野に絶えぬ湧水落ち葉浮く

晩秋や何時の日からか好きになり

静かさや酒とおでんと我一人

年の瀬に江戸を肴の集ひかな

句遊会に所属させて頂き、拙いながらも毎月なんとか三句提出してきました。己の気持ちを籠めてるつもりでも、それを他の方に伝えうる表現ができない。俳句は難しいと思っています。

夏
柳

石原克己

笹の雪しずくとなりてキラキラと

木漏れ日にかすかに揺れてすみれ草

梅が香や茶筌の音の静かなり

にわか雨濡れて牡丹に傘をつけ

雨上がり透けて青葉の日の光

向日葵や迷路に遊ぶ子らの声

窓の蜘蛛そつと手にのせ外に出し

釣り人の背中に揺れる夏柳

岸壁にぬくもり残る夜釣りかな

山を下り里の近くの河鹿笛

煙立つ山の辺の道秋深し

焙烙の味懐かしき落花生

花すすき人声のなき川原かな

ランナーが見え隠れして萩の道

コスモスの色いろいろに一面に

廃線や枯野の中の転轍機

湯気おどるおでんに並ぶちろりかな

鈴鳴らしブナの落ち葉の林行く

夕焼けを

三六

安井正浩

下萌えやシューズの紐もカラフルに

蛇穴に出づ吉日を選びては

菫摘む少女はいつも白き服

春雨の中不揃ひに亀の列

春しぐれ金黒羽白陣を解く

琵琶湖背に旅の終わりの新茶汲む

大胆に牡丹投げ入れ華道展

花筏行きつく先は白い闇

蜘蛛の罫を潜りてたどる寺の径

麦酒酌む病氣自慢の友二人

昇降機夕焼け空を目指しゆく

夕焼けを独り占めして観覧車

走馬灯失ひし日々蘇る

古民家の再生終へり蟬しぐれ

川下る喚声秋の鬼怒川路

秋天を睨む楯鬼誕生鬼

高階に迫る秋色楯の岩

灯台へつづく夕日の枯野原

綺羅裸

城戸崎 雅崇

短シャツの裾の素肌は麦茶色

超ミニもマキシも綺羅裸秋暑し

セザンヌに挑むつもりや林檎三つ

光苔古刹一隅秋彼岸

老夫婦腕支へ行く秋日和

青衣女の障子に映ゆる松園展

吊橋に華語ペアありて鬼怒紅葉

鬼怒下る船待つ朝の焚火かな

蜘蛛の巣の紅葉一片発光す

短日や老いての恋はありやなし

時雨るるやエキナカの傘また求め

楡遣ふ男ありけり水仙花

バサと落つ一葉の音の高きかな

重夫

子持ち蟹大きくうまき師にすすめ

同

手作りの草餅なりき餡多し

同

犬ふぐり花あるものを残し引く

松代

もの干すやかじかみし手を顔に当つ

同

寒鴉アンテナゆらし止まりけり

同

喜寿となる二〇一〇年に俳句を始める この初句集
に一七回忌の父母が大分県中津市で晩年楽しんでいた
句を併せて載せることをお許しいただきたい

路
草

四〇

藤
原
啓
三

春の陽に心も揺れる六十路かな

眩しさの中に見つけし陽のかけを

勤め人鮮風入れたり額の汗

行く春や巢ごもる雀恋の唄

春の宵焼鳥匂ふガード下

新緑や背伸びを競ふ小櫓たち

木漏れ日に微笑む地蔵草の径

蓮の葉や雨粒おどる真珠かな

蓮の葉にカワズ座って仏様

蓮の花朝勤行の声すがし

夕映えに金波銀波の青田波

御施餓鬼の読経に和する蟬しぐれ

暮れなずむ庭のなすび色増せり

暑き日を惜しむか一輪彼岸花

柘榴割れ夕日に溶ける庭の隅

稲穂垂れ螳螂の鎌研ぎ光る

虫達は夜のしじまを突き破る

秋の日の傾くところ佐渡ヶ島

あとがき

『句遊』第十集をお届けします。

平成三年第一集刊行以来、今年が節目の記念号としての発行となりました。

本集への出品は十八名、前集より一挙に五名増となりました。

なお、誠に残念なことです。永年に亘り会員としてご活躍なされた宮川弘道氏が昨年逝去されました。

茲に改めてご冥福をお祈り申し上げます。

また、本会の重鎮 中路良昭氏が昨年退会しました。会創設以来、会の運営にご指導、ご尽力賜り厚くお礼申し上げます。引き続き別の社中で主宰の重責を担われる由、更なるご活躍をお祈り申し上げます。

編集に当たり、出品は従来通り、自選十八句とし、前書き、ルビは原則として付けておりません。また、前集に続き、作品のあとの余白に、自由に短文を書いていただくこととしました。

会員皆様のより一層の親睦を深めると共にご健吟をお祈りします。

平成二十三年三月

編集委員

石野 喜次
佐藤 政夫
清家 静
森 邦彦

(清家 静 記)